

## 清川村立宮ヶ瀬中学校

研究テーマ：「学びに向かう力の育成」

～自律した学習者を目指して～

### 1 実践の目的

先の見えないVUCA（予測が困難なほど変化が激しく、先行き不透明な現代社会）の時代を生きる生徒にとって、「自ら学び続ける力」は今後、益々の重要性を帯びてくる。そのため、学校教育も「教える」から「学びを支援する」という形に変化する必要がある。具体的には〈目標及び計画の設定〉と〈学習とその振り返り〉の連動性を確保することで、「自律した学習者」に育つと仮説設定し、実践の目的とした。また、在校生が一人であることから、緑中学校との交流を増やし、他者と協働する場面や多様な意見に触れ合い、自分自身の考えが形成できるように効果的な取組を研究していく。

### 2 実践の内容

#### （1）校内研究の体制

研究推進委員会は校長、教頭、研究主任で組織され、教務主任が研究主任を担当する。校内研究会は非常勤を含む全職員で、編成される。校内研究会は年7回開催した。その内「研究授業と研究協議」と「研究テーマに沿った講演会」を1回ずつ開催した。研究協議や講演会では横浜国立大学教育学部教授 梅澤秋久先生をお招きし、県教育委員会、県央教育事務所、村教育委員会からも指導・助言を頂いた。

#### （2）校内研修会

4月17日に「極少数人数に対応した評価・評定」校内研修会を行った。指導と評価の一体化や自己肯定感を高める評価について意見を交わした。

6月12日の校内研修会では、横浜国立大学教育学部教授 梅澤秋久先生をお招きし、テーマについての講義をしていただいた。「自律した学習者」になるためには、自身で「学びのサイクル」を回せるようになることが不可欠であり、特に「振り返り」が大切である。また、「待つこと」の大切さ、内発的動機づけ、ヒントを与えて思考させる工夫など具体的な手法を学んだ。これからの時代は「好奇心」を大切に、教師自身も常に情報を「アップデート」し続ける必要がある。これらの内容は、参加者が今後の教育実践に活かせる貴重な学びとなった。



梅澤先生による校内研修会

### (3) 研究授業、研究協議の様子



自分の解き方を他者に説明する様子

3年数学で研究授業、研究協議を行った。前時までの復習をした後、一次関数と二次関数が複合したグラフに関する問題に取り組んだ。生徒は初めて見る問題でも、粘り強く自分なりに考えて表現していた。

梅澤先生の講評では「待つ」と「聞く」を教員側の基本姿勢とする実践により、生徒自ら問題と向き合う心理的安全性が確保されていたと評価を頂いた。また、知識の整合性を図り、数学的な思考力を養うことで、より学びに向かう力を育む土台に厚みが増すことも同時にご助言いただいた。

## 3 実践の成果

### (1) 教師の変容

今年度の研究で、「自律」について深く考える機会を得て、これまでは生徒の課題を焦点化し、先回りして手を差し伸べ過ぎていたと感じた。教師が思っている以上に「考える力」があるという発見は、指導観を大きく変容させた。AI が普及する社会だからこそ、生徒が自ら考え、表現する時間を意図的に作り出すことの重要性を再認識した。知識を一方向的に伝えるのではなく、生徒の興味・関心を引き出すような授業を設計し、「聞く」「待つ」姿勢を大切にする。生徒を信頼し、自発的に学習をマネジメントできるよう「伴走者」としての役割に徹する意識が芽生えた。

### (2) 生徒の変容

当初は指示待ちの姿勢が見られたが、自分自身の状況を客観視し、必要な学習内容や練習計画を自ら選択・決定する行動が増加した。例えば、自由時間には教師からの指示がなくとも自然と単語練習や復習に取り組む姿が見られ、ノートやワークの強制提出を撤廃した状況下でも、自分なりの学習方法を見つけ出すなど、学習への向き合い方に内発的な動機づけに基づく変化が生じている。

## 4 今後の展開

### (1) 今後の研究の方向性

今回の研究は、短期的な成果よりも「チャレンジする過程」に大きな意義があった。特に「自律した学習者の育成」というテーマは指導力向上に直結するもので、継続的な実践として研究を進めることが重要である。この経験を今後の研究に活かしていきたい。



梅澤先生に研究の方向性を示していただきました。

### (2) 残された課題への対応

今回、研究の成果が客観的に分かりにくい、教員間の意識差の調整が難しい、といった課題も浮き彫りになった。研究を実りあるものにするには、全職員の共通理解と足並みを揃えた継続的な取り組み、生徒の具体的な変容を測るための焦点化と客観的指標の設定が今後の鍵となる。